

■ 書 評



災害精神医学

フレデリック・J・スタッ
ダード Jr., アナンド・パー
ンディヤ, クレイグ・L・
カツ 編著 富田博秋,
高橋祥友, 丹羽真一 監訳
星和書店

2015年1月 528頁
本体価格 4,800円+税

本書は、東日本大震災がおきた2011年に American Psychiatric Publishing から出版された “Disaster Psychiatry: Readiness, Evaluation, and Treatment” の訳書である。原著の編著者らは皆、米国の災害精神医学領域で指導的立場にある方ばかりである。また、監訳者らは皆、特に東日本大震災以後、わが国の災害精神医学をリードしてこられた方々ばかりである。平成27年は、阪神大震災後20年目、東日本大震災後4年目であり、最近わが国で災害派遣精神医療チーム（DPAT）の体制整備が行われるなど、災害後の中長期支援のあり方や災害への備えの問題が重要視されている。そのような中で、本書が出版されたことは、非常にタイムリーである。

わが国は災害の多い国であり、地震災害だけでなく、自然災害としては津波・台風・水害・噴火・竜巻など、人為災害としては放射線災害・集団食中毒・輸送事故（船舶・鉄道・飛行機）・無差別殺傷事件など多岐にわたる。被災者の心理的支援が注目されるようになったのは阪神淡路大震災以来であり、その後、いわゆる「こころのケア」の重要性がますます認識されるようになり、災害発生直後から国家レベルでの取り組みが展開され、全国民からの注目と多大な支援を集め、様々なノウハウの蓄積を受け継いだ大規模な地域支援が展開されてきた。多くの精神科医や臨床心理士・スクールカウンセラー・保健師などの専門家が被災地に出向き、危機管理としての制度化や予算化、支援体制作りやかかわりのマニュアル作成などを行った。これらの一部は、インターネットを通じて、国立精神・神経医療研究センターの災害時こ

ころの情報支援センターや本学会を含むいくつかの学会のホームページからダウンロードできる。災害時の精神医学的支援体制の検討課題は多岐にわたるため、課題らを体系化し、普及させることが今後の重要な課題である。

災害時精神医学に関する包括的なテキストは、筆者の知る限りなく、そのため本書は、この領域における待望の一冊である。構成としては、第I部 災害への備え、第II部 評価、第III部 介入、第IV部 新たに問題となりつつある事柄、その他の事情である。各部の詳細は、以下の通りである。第I部：1. 災害への備えと災害発生時の支援システム、2. 災害前、災害時、災害後のリスクコミュニケーション、3. 災害支援者自身の救済—災害支援コミュニティのセルフケア、4. ニーズ・アセスメント；第II部：5. 精神医学的評価、6. 災害弱者への配慮、7. 重篤な精神疾患、8. 薬物乱用、9. パーソナリティに関する問題、10. 外傷と医学的愁訴のトリアージ、11. 悲嘆とレジリエンス；第III部：12. サイコロジカル、ファーストエイド、13. 集団への介入と家族への介入、14. 心理療法、15. 精神薬理学—急性期一、16. 精神薬理学—急性期の後の段階一、17. 子どもと青少年に対する精神医学的介入、18. 高齢者への精神医学的介入；第IV部：19. 親善大使としての精神科医、20. 法と倫理の問題、21. 災害時と公衆衛生の緊急事態における遠隔精神医療。

本書は、根拠に基づいた災害支援を行うための実践的なガイドブックである。災害前の備えから発災後急性期のメンタルヘルス支援・災害に伴ってみられる精神疾患の治療、倫理・法令の面まで、幅広い問題に関することが、体系的に記載されている。図表や参考文献が豊富で、各章末には、学習のポイントと復習問題があり、学習しやすい構成になっている。過去の災害を参考にしたケース・シナリオも多数含まれ、理解を深めるのに役立つ。したがって、精神科医だけでなく、災害時のこころのケアに関わるあらゆる職種にとっても有用であろう。

(高橋秀俊)